

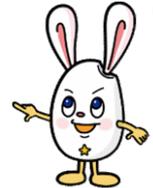
「星空舞」における 高品位・良食味となる生育指標等の設定

「星空舞」のブランド化を進めるために、精玄米歩合、収量、品質、食味を高水準で維持するために必要な生育指標や水管理指標を明らかにしました。

「星空舞」の栽培上の目標値

- 整粒率 70%(見た目が綺麗なお米の割りあい)
- 食味値 75(機械で測定したお米の美味しさの基準値)
- 精玄米収量 10アールあたり500kg(ふるい目で振るった玄米の重さ)
- 精玄米歩合 92%(ふるい目の上に残る玄米の割りあい)

ブランド化のために目標値を設定したよ



この目標値に達成したほ場とそうでないほ場、様々な環境で栽培した「星空舞」の生育データとの関係を調べ、標高地帯別に「星空舞」の生育指標を設定しました。

● 標高地帯別の生育指標・水管理指標を設定しました。

標高によって生育と品質・収量・食味の傾向が違うから標高別に指標を設定したよ



表1 「星空舞」の栽培上の目標値を達成できる生育指標

	総粒数 (粒/㎡)	幼形期茎数 (本/㎡)	穂数 (本/㎡)	葉色 (SPAD値)			
				幼形期	穂肥I期	出穂期	出穂20日後
平坦地帯 (0~150m)	25,000~29,000	290~420	300~360	36 以下	35 以下	36 以下	34 以下
中間地帯 (150~300m)	25,000~32,000	320~540	300~410	38 以下	-	35 以下	34 以下
山間地帯 (300~500m)	25,000~34,000	310~540	290~430	33 以下	-	37 以下	37 以下

注) 葉色板からSPAD値への読み替えは星空舞栽培手帳を参照してください。

- 目標を達成するために、中干しの終了時期や幼穂形成期、出穂20日後の土の硬さの目安を設定しました。土壤硬度計が無くてかかるとにゅっくりと全体重を乗せた時の田面からの沈んだ深さや亀裂の幅でおおよその土壤硬度が判別できます。

中干しは干し過ぎないように注意して、幼穂形成期や出穂の20日後は土が軟らかい状態にしておくことが大切だよ



表2 水管理指標としての土壤硬度及び土壤硬度に読み替えることのできる各種指標との関係

地帯	水管理指標								
	かかと沈下深(cm)			亀裂幅(mm)			土壤硬度(mm)		
	中干終了時	幼形期	出穂20日後	中干終了時	幼形期	出穂20日後	中干終了時	幼形期	出穂20日後
平坦	4	5~9	7~9	10	3~8	3~5	11	3~10	3~6
中間	4	6~10	6~8	10	1~6	3~6	11	1~8	4~7
山間	4	6~9	6~10	10	2~6	1~6	11	2~7	1~8

注1) 土壤硬度は山中式土壤硬度計値を示す。

注2) かかと沈下深は様々な体重の者が計測したデータにより算出し、亀裂幅は大小様々な亀裂を計測したデータにより算出した。

「星空舞」において、 中干しの影響について調査しました。

●中干しし過ぎると、小さい茎が枯れてなくなり、収量が少なくなりますので注意しましょう(表3)。

●一方で、中干しを全くしないと葉色が濃いまま生育が進み、食味が悪くなりやすいため、適切な中干しの実施に努めましょう(図, 表3)。

●中干しを終了する良いタイミングは、かかとを立てて片足立ちし、4センチ程度沈む硬さです。



かかと沈下深計測時のイメージ

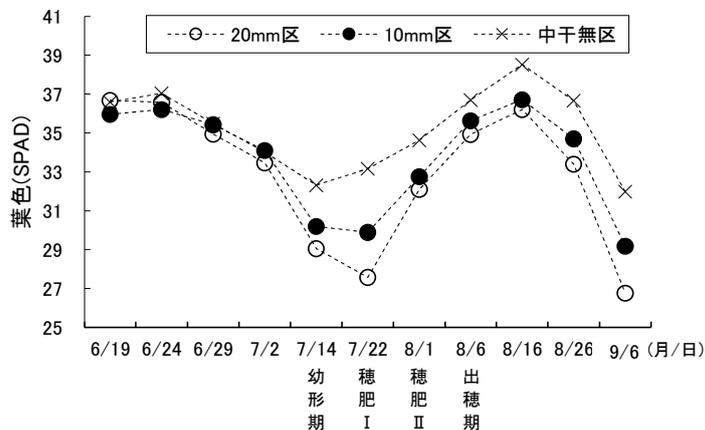


図.中干しの強さによる葉色のちがい
※20mm,10mmは中干し終了時の土壌硬度

表3.中干し強度が「星空舞」の生育に及ぼす影響

区名	稈長 (cm)	穂数 (本/m ²)	有効茎歩合 (%)	遅れ穂率 (%)	精玄米重 (kg/a)	食味値	たんぱく質含有率 (%)	味度値	倒伏程度 (0-4)
20mm	76 b	312	78.7 b	8.3 a	49.6 b	85 a	6.8 b	86.0 a	1.0 c
10mm	78 b	327	88.2 a	5.2 ab	51.5 b	83 a	7.0 b	84.5 ab	1.4 b
中干し無	82 a	355	88.7 a	2.8 b	61.8 a	78 b	7.6 a	80.0 b	2.0 a
分散分析	**	ns	**	*	*	**	**	†	**

注1)分散分析の結果を†:10%、*:5%、**:1%水準で有意差が有ることを示し、試験区間でTukey-Kramer法による多重比較検定を行い、異なるアルファベット間で有意差があることを示す。

注2)赤色で塗りつぶしたところは他の区に比べて不良なことを示す。

ちょうどの干し加減
でおいしくな~れ。



赤のバック
のところは、他に
比べて良くないっ
て意味だよ。



利用上の留意点

- 1) 普及の対象 県内の平坦地帯から標高500m程度まで。
- 2) 高標高地帯においては、出穂や登熟の遅延が発生することが想定されるため、リスクを理解した上での作付けが条件となる。
- 3) 分施肥体系における10a当り窒素施用量は、基肥3kgとし、穂肥は葉色診断を行うこと。
- 4) 基肥一発体系における10a当り窒素施用量は6kgとする。
- 5) 栽植密度は田植機の植付株数の設定で坪当たり50~60株とする。
- 6) 大豆の跡作では、基肥無施用、穂肥Ⅰを葉色診断に応じて施用し、穂肥Ⅱは無施用とする。
- 7) 排水不良・高地力ほ場では、基肥を窒素施用量で0~2kg/10aとし、穂肥は葉色診断に応じて施用する。
- 8) レンゲの跡作で栽培する場合は、レンゲの生草量は1t/10a未満とし、移植の20日前までにすき込み、基肥無施用の上、穂肥を葉色診断に応じて施用することを基本とする。
- 9) 指標等の設定は随時見直しを行うので新たな情報に留意する。

(問い合わせ先) 鳥取県農業試験場 作物研究室 TEL:0857-53-0721

※本書から転載複製する場合には必ず農業試験場の許可を受けて下さい